
最終計画・未来人討伐作戦

神崎颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最終計画・未来人討伐作戦

【Nコード】

N1304B

【作者名】

神崎颯

【あらすじ】

今からちよつと後の話、未来人が地球を壊滅させるためやって来た。国連は戦うための力・レアリアを持った人間を未来人と戦わせようと考えた。レアリアを持ってしまった普通の高校生・奥村楓と謎の美少女転校生・天宮真理と他多数の人間がお送りするベタでバカっぽいバトル的な物語。

第一話：ベタな始まり（前書き）

ど素人の小説ですので、なんかすいません。

第一話…ベタな始まり

「おいおい、まじかよ」

そりゃ誰だってそう思うだろうよ。

目の前が数分間で焼け野原だぜ？

これが今世界の話題を独り占めしている『未来人』とやらか。

しかしホントおかしな力使うなあ。

なんだアレ？レーザーか？

青い光が通った場所が豆腐みたいに脆く崩れ去ってるではありませんせんか。てか俺何故に敬語？

「とりあえず……逃げなければ」

俺は走った。

今なら長距離走でベン・ジョンソンにだって負ける気はしないさ。それほど必死だったんだ。

でも多分、ここまでだな。

上から建物が崩れて落ちてくるし、実際もう走る元気なんてねえよ。

あー、終わったな、俺の人生。

せめて死ぬ前にかわいー子とキスくらいしたかったぜ。

てかこれ落ちてきたら確実に死ぬよなあ。

俺が死んでも妹の陽子は一人で生きていけるかなあ……

あいつ泣き虫だし、心配だな。

剛にもお別れぐらい言いたかったな。

あいつにはこの前500円借りっぱなしだし。

「もう少し、生きたかったな……」

「
う
わ
あ
！」

「
う
わ
あ
！」

俺は目を覚ました。

「夢、だったのかな」

俺はとりあえずポジティブに考えてみた。

「寒気がするくらいリアルな夢だったなあ」

わざわざ独り言のように呟いているのは今尚ある恐怖感を紛らわすためだ。

「お兄ちゃんー、朝ご飯だよー」

陽子の声だ。なるほど、マジで夢だったらしいな。

町が崩壊して陽子がいつも通りなはずないだろうしな。

「今行く。」

俺はベッドから立ち上がった。

するとベッドには赤いシミがついていた。

「血じゃねえ……よな」

俺はもう1回ポジティブに考えてみた。

そうだ、これはアレだ、アセロラジュースだ。そう考えながら俺は足早にリビングへ向かった。

「おはよう陽子」

「おはようお兄ちゃん」

わが妹ながら元気な子供だなあ。

陽子が6歳の時、俺たちの両親を殺された。

俺は大泣きしている陽子を見た。そのときから俺は陽子には苦労をかけさせまいと心の中で誓った。

だが4年たった今では家事を全て陽子にやらせてしまっている。

10歳にして掃除、洗濯、料理他いろいろなんでも出来る。

将来はいいお嫁さんになるだろうな。

泣き虫だけど。

兄である俺の行く末はフリーターだろうが。

飯も食べ終わり俺が制服に着替えていると、制服から1枚の紙が

落ちた。

「ん？　なんだこれ？」

その紙にはこう書かれていた。

『保持者　No. 013』

これが何の紙で保持者とは何か、No. 13とは何なのか、俺には全くわからなかった。

「まあいいや」

今度は深く考えないことにした。　その紙をゴミ箱に捨てて、俺は学校に向かった。

歩いて10分、俺の通う神命高校に着いた。

この高校を選んだ理由は何と言っても俺の家との近さだ。

朝のんびり出来るのはとても良いことだ。

「おはよう剛」

「おう、グッモーニン楓」

こいつの名前は森野剛。

『剛』は『つよし』ではなく『ごう』と読むから要注意だ。

初見の奴は大体間違える。

「そういえば今日、転校生が来るらしいぜ」

「マジか？　女か？」

「御名答」

おいおいマジかよ？　朝からテンション急上昇だよ。

「……美人か？」

「……ふふ」

「焦らすなよな」

「はい全員席座れー」

さあてキタ。転校生のお披露目ですか。こんなワクワクはSM○

Pのライブ以来だぜ。

「えー、では今日は私達の新しい仲間を紹介しよう」

いえーい、待ってましたー。

そんな声が所々から飛び交っている。

さあ、どんな子でしょうねえ。

「紹介しよう。天宮真理さんだ。彼女はお父さんの転勤でこんな忙しい時期にこちらに来てくれた。仲良くしろよ、お前ら。」

俺は『美』という言葉は彼女のために作られたのだと思った。

夜空よりも暗く深い艶やかな長い黒髪、美しく整った目鼻立ち、雪のように闇をも照らし出すような輝く白い肌、羽根を生やしたら天に翔んで行きそうな程美しかった。彼女の前では黄金ですら目を眩ますかもしれない。

しかもアレは多分Dカップ以上だ。ありがとう神様。私のお手元に天使を遣わせて頂けるとは。今度賽銭箱に50円玉いれときます。

「天宮真理です。父親の転勤の多いのであまりお友達がいまませんでした。この学校ではたくさんお友達を作りたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。」

美しくも力強く凜とした声。一挙一動が優雅で、少し儂げなものだった。

「森野さーん……」

俺は下卑た笑みを浮かべながら剛を呼んだ。

「……おう」

さすがは剛だ。俺の考えを即座に読んだ。話が早いってもんだ。

そしてクラス委員の比野が仕切り始めた。

「えーでは天宮さんに質問ある人は……」

『はい!』

俺と剛は比野の言葉を遮り太陽を掴むかのように天高くへと手を伸ばした。

「じゃあ楓と剛」

比野が俺らを当ててコンマ1秒経たないうちに俺らは叫んだ。

『3サイズを教えてください!』

よくやった、お前ら漢だよ。

そんな声がクラス中から聞こえて来た。

「天宮さん、答えたくなければ答えずにアイツらの顔面にシャイニングウィザードかましてもいいんだよ?」

比野は真面目野郎でアホだからこういう場面でも空気を読まずに『答えなくていい』などという戯言を口に出すこともしばしばある。

「まあ……仲良くなるためと考えれば、仕方ありません……」

これはまさか……

こういうのはムードメイク、つまりは雰囲気作りのために言うのであって言う当人達は聞けないことなど百も承知である。

だがしかしどうだ!この天宮真理という女!

『仲良くなりたいので』という理由で会ってからわずか数分の獣達に自分のトップシークレットナンバーを教えようと言うではないか!これはもしや……いまや国宝とまで称されている……

天然!

そうと分かれれば放課後までに生年月日、血液型、趣味、住所、好きな食べ物、好きな飲み物、よく行く場所、性感帯まで聞くことも可能だ。

そして天宮さんが自分の3サイズを発表した後約20分、男子達は1時間目の現代文の授業なんてお構いなしに天宮さんを質問責めにした。

「血液型は何型ですか!?!」

「ABです」

「動物は何が好きですか!?!」

「ヒグマです」

「愛ってなんですか!?!」

「愛の価値観というものは人によって違うと思います」

「抱いてください!」

「何をですか?」

「踏んでください!」

「喜んで」

「今日の下着の色はなんですか!?!」

「黒です」

「1日で5万円稼げるアルバイトあるんですけどやりませんか!?!」

「アルバイトする時間がないのでお断りさせていただきます」

「……!?!」

「……」

……

そんなこんなでもう1日が終わってしまった。早いな。

結局性感帯は聞けなかったがメルアドはなんとかゲット出来た。

周りを見渡すともう天宮さんはいなかった。こんな暑苦しい場所にいつまでもいてられるかという暗示だろうか。まあ天宮さん宅の住所も知ってるから行こうと思えば行けるわけだが初日から家へと出向くのは気がひけるし何よりひかれる気がする。

ここは帰ったら速攻でメールをするしかない。こっちのメルアドだってもう教えてあるんだ。何も案ずることはない。本能に従えばいいんだ。

そして俺は足早に家に向かった。

するとメールが来た。

「誰だ……剛か？」

画面には『天宮真理様』と浮かび上がっていた。

「こ、これは……」

恐る恐るメールを見てみた。

『今から私の家に来れます？』

……

俺はどうすれば良いのか考えた。

何故地球は回っているのかも考えた。

結論、返信。

『もち！今からソッコー行くよ！』

とメールを送り俺は全速力で走った。

そして15分後天宮さん宅に到着。

宅と言っても高級そうなマンションだな。

『着いたよー』と送る。

『今開ける』と返信が来てマンションの玄関の扉が開いた。

そしてダッシュで5階の天宮さんの部屋へ行き、インターホンを押した。

「はい」

という甘い、高い声。

心音が地響きを起こすかと思われた程胸が高鳴っていた。

まさか会って1日目で自宅にあがらせていただけるとは。

これも天然という性格のみがなしえる技なのか。

そしてドアオープン。嗚呼、扉の向こうから後光が差し込んでくる……

「いらっしやい。どうぞ上がってください」

「お、おじゃまします」

「そんな緊張しなくても平気ですよ。親なんていないし」

天宮さんの親御さん、こんな可愛い娘をよくこんなところに1人で住ませましたね。ていうか天宮さんの転校の原因で父親の転勤だろ？ならなんで1人暮らしなんだ？まだ謎でいっぱいだな。

「で、何故俺を呼んだんですか？」

「あーそうですね。もう本題行っちゃいましょうか」

「お願いします」

さあなんなんだ俺を呼んだ理由は。告白か？告白なのか？一目惚れ

か？

「実はあなたはタダの人間じゃありません。」

……はい？

「あなたはレアリアという特殊な力を持っています。未来人と戦うための力を」

「……えーっと、話が読めて来ないんですけど」

「2年前、国連はこのまま未来人を野放しにしておけば地球は滅びてしまうと考えました。だから未来人に対抗すべく地球に『イクセス菌』を撒きました。この菌を吸ったごく一部の者は特殊な力を得ることが出来ます。その力をレアリアと言います。そして国連はレアリアを持った人間を集め、未来人を討伐しようとしています。そしてあなたはレアリアを持っている。つまりはあなたに未来人討伐のために戦ってもらいたいと言うことです」

……

えーーーーー！

第一話：ベタな始まり（後書き）

コメントや注意すべき事や改善すべき点などを貰えらるととても有り難いです。

第二話：最後の日常（前書き）

ど素人ですので、ある程度の覚悟をお願いします。

第二話：最後の日常

いつも通りの空、いつも通りの太陽、いつも通りの雲。いつも通りの道、いつも通りの自販機、いつも通りの擦れ違う人。いや、擦れ違う人はいつも違うか、うん。

天宮さんに『あんただだの人間と違うねん』的なことを言われ1週間が経った。今のとこなんの変化もなくいつも通りの何の変哲もない日々を送っていた。

「あー、つまらん」

なんか面白いこと無いかなー、っと草食動物並に視野をおっ広げて見たりしたが、そう簡単に刺激や変化を与えてくれるものは見つかるわけもなく、深い溜め息を吐き、また視野を狭めた。

「グッモーニン楓エ！」

「ガハッ！」

剛の奴が朝一にシャイニングウイザードをくれた。

これはお返しをしなければならぬな、うん。

「おう、おはよう……剛！」

そう言いながら俺は膝車で剛を倒し、ギロチンチョークをくらわせたやった。

朝っぱらの道路で何やってるんだ、俺らは。

「痛たたたたっ！ ギブギブギブ！」

よし、勝った。

「おー痛い……時に楓よ。天宮さんにはメール送ったのか？」

「……」

これは……本当のことを言うべきだろうか。

まさか向こうからメールが来てしかも家にお呼ばれをした挙句あなたはただの人間じゃないって言われたなんて言っても信じないよなあ。

よし、言わないのが賢明だな、うん。

「俺……実は昨日天宮さんにメールで家に来いって呼ばれたんだよ」

……ん？

おかしいな、剛が俺がされたことと同じようなことを言った気が……

「それでなんか『あなたはただの人間じゃありません』って言われた」

おいおい、もろ被りじゃねーか。てか俺と全く同じだよ。え、嘘、マジ？

てか良く言う気になったなお前。俺がもしその話知らないでそんなこと言われたら『寝言は寝て言え』と言い、さらに罵倒しただろう。だが、俺は同じ体験を受けてるから信じるぜ。

「実は俺も……」

とりあえず俺も昨日天宮さんと話した一部始終を剛に話した。

「あれは………一体なんだったんだろうな」

剛は柄にも無く真剣な目で俺に聞いて来た。

「さあ？ 新手のギャグじゃねーの」

いつも通りヘラヘラ笑いながら言い返す俺。そうだ、あれはギャグ

なんだよ。天宮さんが少しでも皆と仲良くなりたからわざわざ家に呼んでまでしてギャグを言った。ただ、それだけだ。

「でも……あの時の天宮さんの目、どことなく真剣な感じだったよ」
なあ、剛。純粹なのは良いことだ。お前は馬鹿だし俺と同じようにヘラヘラしてるけど純粹だ。そこがお前の唯一の良いところだ。でも、言われた言葉をそのまま鵜呑みにするのはあまりいいことじゃないと思うぞ。

「お前……自分が普通の人間じゃないと思うか？」

「それは……」

「俺らは彼女もない至って普通の高校2年生。ただそれだけだ。こんな俺らが普通の人間じゃないと思うか？」

「……」

流石に剛も黙り込んだ。まあちよつと考えれば分かることだ、俺らがそんじゃそこらにいる奴等と同じ普通の人間なんだってことくらい。

「……そんなに気になるんだったらさ、学校行って天宮さんに聞けば良いさ」

「あ、そうか」

今更気付いたのかよ。

「じゃあちやっちゃといくぞ」

そして俺らは走っていった。

そう、俺らの日常を壊すために。

第二話：最後の日常（後書き）

コメントや意見や直すべき点等ありましたらお申付けください。お
願います。

第三話：初戦の敵はチャラ男！？（前書き）

自分の語彙力の低さにはウンザリします…（泣）

第三話：初戦の敵はチャラ男!?

「……で」

「何故こうなっているのだろうか」

朝、学校に着いた俺たちは相変わらず皆に囲まれている天宮さんのところへ直行した。しかし天宮さんは俺たちの問い掛けにに答えずに一言だけポツリと言って、また皆と会話を始めた。

「放課後、屋上に来てください」

……で、だ。

なんでわざわざ屋上に行かなければならんのだ。

こちら側としてはちよつとした質疑応答するだけなのだから教室で全然良いのだが。

天宮さんにとって都合が悪いのかな？

そういえば他に天宮さんの電波話を聞かされた奴はいるのだろうか。いたのだったら挙手してほしい。正直、剛と二人だけではキツイ。

援護を頼む。いや、むしろ最前で戦ってくれ。いや、もちろん実際戦うわけじゃないんだが。

そんなことを延々と考えていたらドアの軋む嫌な音が屋上に広がった。

「ごめんなさい、待たせちゃって」

「いや、全然っすよ。俺らも今来たところっすよ」

「じゃ、話そっか」

「あの……天宮さん」

「はい？」

「この間の話、真面目に言ってるんですか？」

「この間のって……未来人討伐作戦の話ですか？」

「ああ、多分それです」

「ええ、真面目ですよ。それも大真面目です」

天宮さんは少し頬を膨らませた。信じてもらってないと知り、気分が害されたのであろう。でもやはり気品の漂う美しさを感じる。

その時、剛がまたもや重そうな口調で話始めた。

「はっきり言って、なんなんすか？ その未来人討伐作戦って」

「この間言ったとおり、レアリアの力を持った人を集めて未来人と戦おう、って作戦ですよ」

俺は天宮さんの目を見た。濁りのない透き通った目だ。その純粹且つ強い眼光は剛の目の方向に真っ直ぐと向けられていた。

少なくとも俺は、この人が嘘を吐いているとはとても思えなかった。

「そこまで信用出来ないなら、証拠見せますよ」

「証拠お？」

ハモってしまった。だがこの際気にしない。

俺は天宮さんが『嘘を吐いている』とは思ってないが言ったこと全てが真実だとは全く思っていなかった。

「じゃあ、証拠見せてもらいますか。で、なんなんすか、証拠って？」

「もうそろそろわかりますよ。あ、ほら、来た」

天宮さんの視線の先には人がいた。俺らが来た時にはいなかった。だが今確かにそいつは給水塔の上に立っている。誰なんだ、こいつは。

まさか――

「未来人……」

先に言ったのは剛だった。

しかし驚きだ。聞いてはいたもののまさかこんなに人間に似ているとは。それもそうか、未来人だもんな。俺らの成れの果てみたいなものだもんな。

「ヤッホー、レアリア使いの諸君。元気にしてますかい？」

ド派手な金髪、ドデカイピアス、程よく焼けた小麦色の肌、綺麗な目鼻立ち、スラリとのびた長い足。

見た目通りのとても軽い口調だ。

「何？ まあた新人見つけちゃったの？ そりや面倒臭いなあ。

将来的に俺らの障害と成りうる奴等は全員……ぶっ殺す！」

「うわあっ！」

またもや剛とハモった。

やべえ……確実にやべえ……

なんか手から出したぜ。てか地面凹んでるんだけど。ちよつと……まじ怖ええ！

「……大丈夫ですよ」

天宮さんの凜とした声が腰を抜かし座り込んでしまった俺らを暖かく包んだ。

「彼らを殺すために、私たちレアリアはいるんですから。じゃあそ

ろそろ証拠、見せてあげますね」

すると、天宮さんが目を瞑り、空に向かって両手を伸ばした。何をやっているのだろう。戦うための力？ いったいどんな力なんだ？

「呼応せよ……ストーンベルダ！」

天宮さんが空に掲げた両の手に武器が現れた。

それは武器と呼ぶには生温いくらい禍々しく、巨大なものだった。長さは天宮さんの身長の上、棒の先は万物を貫くかの様に鋭利になり、その根元の辺りに弧を描く様に巨大な刃がついている。そう、いうなれば斧だ。斧の刃の反対側にはこれまた種類の違う刀剣のような刃がついていた。恐らくこの武器一つで斬る・裂く・刺すなど様々な攻撃方法が存在するのだろう。

「それでは、遊びましょうか。未来人さん」

「ひゃあははははははは！」

それから天宮さんと名も分からぬ未来人との戦闘が始まった。

俺と剛は完璧な傍観者だった。

だってそうだろう？

こんな中突っ込んでったら一瞬で塵か何かになるぜ。

とにかく、俺ら一般人がこの攻撃の嵐の中に突っ込むのは不可能ということだ。

ん？ 一般人？

そういえば俺らは天宮さんに『戦うための力』があるといわれた。ならば俺らもあのような厳つい武器を出せるのか？ まあ正直な話出せたところで戦う気にはなれないが。

「奥村さん！ 森野さん！」

戦闘中の天宮さんが俺らの姓名を呼ぶ。

「力を、使ってください！」

俺らはポカンとした。

そりゃそうだろ。だって……

「力ってどうやって使うんですかー！」

俺の疑問を剛が答えた。

「気持ちを高めるんです！」

気持ちを高める？ どういう意味なのだろうか。

「あなた方が力を得たと言うことは何か守りたい物や守りたい人がいるハズです！」

……確かにいる。

妹の陽子だ。

アイツにだけは一切の負担をかけさせたくない。

実は俺はあの夢——俺らの町が壊される夢を見てから心から安らいだ時間がない。

いつかあれが現実のものとなるんじゃないか、と俺にしてはネガティブなことを考えてしまうわけだ。

あの夢が現実になったら、恐らく陽子だけではなくここら一帯の人は全員死ぬだろう。

それはさせてはいけない。

陽子は殺させない。

陽子だけは守る。

陽子だけは絶対――

すると俺の握り締めていた拳の隙間からが途端に光が漏れ出した。

「これは……」

「奥村さんの気持ちの高まりに呼応しと力が目覚めようとしてるんです！」

俺もあの力を手に入れるのか。

戦うための力、いや、違うな。

守るための力が。

「うおおおおお！」

とりあえず天宮さんの真似をして両の手を掲げる。

すると俺の手の中の光が輝きを一層増し、広がっていった。

それは徐々に形となっていく。

そして現れたそれは――槍。

やはり馬鹿でかい槍。

俺の身長の1.5倍はある。要するに2.7メートルくらいだ。

刃の部分が槍の大部分を占め、それは恐ろしい程に黒かった。まだ日が昇っているというのに屋上一帯を闇に包んでしまうようだった。天宮さんの武器も禍々しかったがこれはなんというか、とにかく深

く、暗かった。

じっと見ていると吸い込まれそうだった。

「これが……」

「奥村さんの武器です。名前は後で考えて下さい。じゃあ、この未来人を倒してみてください」

……え、今なんて？

俺はたった今、力が目覚めたばかりで、名前も考えてない、使い方も分からない、ましてや戦闘なんて剛とのプロレス紛いのじゃあいしかやったことがない。その俺にどう戦えと。

「大丈夫です。最初は武器が戦い方を教えてくれます」

いや、そうは言われてもやっぱり怖い。

だって敵はなんか手からよく分からないもの出すんだぜ？

それはコンクリ凹ますんだぜ？

そんなのと戦えるはず……

と考えていると妙な悪寒がした。

「へえ……お前から死にたいんだあ……」

いやいやいやいやいやいやいやいやいやそんなこと一言も言っていないよ未来人さん！

むしろ貴方様の靴を舐めてでも生きたいですよ！

「まあどっちにしろ力が目覚めちゃったから殺さないとボスが怒る

しなあ……じゃ、ぶっ殺おおおす！」

きゃー！ー！ー！

叫びながら突っ込んで来たー！

てか助けてー！

剛はなんか相変わらず腰抜かしてるっぽいし、天宮さんはなんかニコニコしながらこっち見てるし……

「ギャー！ちょっとヘルプミー！」

すると、俺の手中的の槍が俺を引っ張った。
そして未来人を貫いた。
貫通している。

「ごはあっ！」

未来人はよろめき、後ろへ倒れた。

てか何この槍、勝手に動いたよ今？

「てめえ……このヤロウ……」

未来人がよろめきながら立ったところでまたもや槍が俺を引っ張る。

そして今度は俺が未来人へ突っ込んでいった。

——クイックスタンス

すると、槍が……加速した。俺を引っ張ったまま槍が突風のように加速した。

そして気付いた時には屋上の端に立っていた。

「く……そ……が……」

後ろから未来人の呻き声と、ドサツという倒れる音が聞こえた。

パチパチパチ。

「やっぱり戦えたじゃないですか」

拍手しながら天宮さんが涙目の俺に近付いて来る。

「どうでした？ 初めての戦闘は」

「……生きた心地がしませんでしたよ」

相変わらず剛は腰を抜かしている。しかも今回は白目まで剥いている。

画して、俺の非日常は始まったわけだ。

第三話：初戦の敵はチャラ男！？（後書き）

誰か語彙力をわけてください…

第四話：愛らしい名の山男（前書き）

更新が遅れてすみません：

第四話：愛らしい名の山男

夕飯が食べ終わった俺は、テレビでバラエティ番組を見ていた。最近のバラエティは金をかけてるだけあってなかなか面白い。

ブラウン管をボーッと眺めていたら突如俺の携帯電話がなった。着信だ。誰からだろう。どうせ剛辺りから…

『天宮真理様』

ピッ。

「…はいもしもし」

「もしもし、奥村さんですか？」

「一応奥村です」

「はい、では学校裏の公園に来てください。出来る限り早く」

「うーい」

ピッ。

10秒で会話終了。

何やら急いでるみたいだったが何があったのだろうか。愛の告白なら嬉しいのだが。

「陽子ー、俺出かけてくるから先風呂入っというてな」

「はぁーい」

陽子の明るい声を聞いた後、俺は急いで靴を履いた。

昔、母親に買ってもらったマウンテンバイクで公園へと急ぐ。

またこの前みたいに未来人が来たらどうしよう……

いくら『レアリア』とやらを持ってるとしてもそんな生死を掛けた戦いを好き好んでやる俺では無い。

極力戦いは避けたいものだ。

そんな弱気な事を考えてるうちに目的の公園に到着。

なかなか広い公園だが、今は空が真っ暗な時間なので陽気に遊ぶ子供はいなかった。なので目的の人物もすぐ発見出来た。

しかし、よく見ると天宮さんの隣りには剛もいる。

剛も呼び出されたのだろうか。

公園入口にマウンテンバイクを止め、その2人に歩み寄る。

「こんばんは、剛。天宮さん」

「ばんわ」

「こんばんは、奥村さん」

「何故剛がいるんだ？」

「何故って……だって俺が天宮さんと呼んだんだもん」

「はあ？ 何故」

「天宮さんにはもう話したが、もう何日も考えたんだよ。俺にもレアリアがあるハズなのに発動しないとはこれいかに、ってことを」

まあ確かに謎だ。

剛もレアリア使い（本来はホルダーと呼ぶらしい）とやらなら俺や天宮さんのようにあの厳つい武器を出すことが出来るハズだ。なのに何故出ないのだろうか。

「それは恐らく守りたいものがハッキリして無いんじゃないですか？」

天宮さんの声が夜の公園に響く。

「……どういふことですか？」

剛が眈々とした調子で尋ねる。

「レアリアは何かを守る力です。奥村さんなら妹さんのように何かを守りたいと思う強い気持ちに反応して力は目覚めるんですよ」
へえ〜なるほど……ってなんで天宮さんは俺の守りたい人が陽子だって知ってるんだ？

「じゃあ天宮さんにも守りたいものってあるんですか？」

「ありますよ」

「それはなんですか？」

すると何故か天宮さんの顔が見る見るうちに赤く染まった。

「ど、どうでもいいことじゃないですかそんなの！」

「いやいや、我々としては興味深いものですよ。なあ楓」

「ああ、もう気になって今日の夜は寝れそうにありません」

天宮さんは怒りながらも顔を赤く染めている。

しかしまあ……

怒っている顔も美しいなあ……

「ま、まあそんなことは置いといて……森野さん。早く守りたいもの見つけてくださいよ」

「うーん、守りたいものですか……」

それから剛は30分間考え続けた。

その間俺と天宮さんはホットココアを飲みながらのんびりと話していた。

「天宮さん、未来人についてももう少し教えていただけますか？ ニュースとかの情報だけじゃちょっと……」

「わかりました」

そういうと天宮さんは一回咳払いをして、淡々と話し始めた。

「未来人は理由は分からないのですけどこの世界を壊そうとしています。確認された数は13人です。全員未来の兵器か何かを操り破壊を繰り返します。この前戦った敵も何か力を使っていたでしょう？」

「たしか手からなんか発射しましたね」

「そう、そのような力を皆持っているんです」

そして人差し指を俺に向けて強く言った。

「で、奴等に対抗すべく世界が考えたのが『レアリア』なんですよ」

「はぁなるほどなるほど」

「わかっていただけたでしょうか？」

天宮さんが微笑みかけてきた。

「あの、もう一個質問いいですか？」

「どうぞ」

「何故守りたいものがハッキリしてないとレアリアは発動しないんですか？」

天宮さんは少し俯きながら応えた。

「レアリアを……悪用する人がでてくる可能性を恐れたんです。

私利私欲に使う人がいたら、それは世界の平和には繋がらないと思います」

はぁ、なるほど。

だからか。

確かに守りたいものがあれば私利私欲のことなんか考えてらんないな。

……てことはもしかしたら『守りたいものがある人』にレアリアの能力がついたのではないか。

そんな話をしていたら剛が急に叫んだ。

「女菊！」

俺と天宮さんは突然叫んだ剛を汚物を見るような目で見つめた。

「……なんだその女菊って」

「俺の守りたい人だよ！」

「お前とはどんな関係だ？」

「幼馴染みだよ！ お前も知ってる」

俺の肩を力強く掴んで剛は叫んだ。剛さん、近い近い。

「もしかして女菊って……あの安澄^{アスミメギク}女菊か？」

「そうだよ！ 昔よく一緒に遊んだろ」

確かに俺は女菊という人物を知っている。小学校低学年の頃は剛と俺と女菊で遊んだものだった。

とても仲が良かった。

そう、その頃は。

「あんな奴、何故今更守ってやる必要がある……あいつは俺達を騙したんだぞ！」

俺は夜の公園にも関わらず怒鳴ってしまった。

「それでも俺は好きだった！ そして、今もその思いは変わらない」

淡々とした調子で剛は語り始めた。

「確かにあのバレンタインの日、あいつは俺達を騙した。でも、それはアイツが不器用だったから。過ちは正せるハズだ！」

希望に満ちた目。だがどこか儚げだった。

「無理だ。もうあの頃の俺達には……」

もう戻れない。

あの頃のトラウマのせいで。

女菊の悪意のせいで。

幼かった自分のせいで。

「なんでなんだよ！　アイツはそんな悪いことをしたか？」

ああ、したさ。

幼かった頃の俺には十分なくらいな。

だってアイツは……

「あのーお2人とも、お話中悪いんですけど……敵ですよ」
非日常への移り変わりを天宮さんが告げた。

俺と剛と天宮さんの視線の先にいたのは、1人の男。

「コイツァ……」

「すげえ……」

先程の口論など忘れてしまう程俺と剛は驚嘆した。

何故ならその目の前に立っている男……いや、正確には10メートル程離れているのだが、なんと目の前に立っているように錯覚させる程デカイ。

肩幅は山のように広く、背もやはり山のように高い。

まさに山男。

「おい、お前らレアリア使いだろ」

山男が物凄く低い声で言った。

「そうですけど……だったらどうするんです？」

天宮さんが淡々と答える。どこか挑発するように聞こえる。

「殺すだけだ」

するとその山男は猛虎のごとく突っ込んで来た。

あの巨体であのスピード、かなりヤバそうだ。

俺らはなんとか避けることが出来た。

そして山男は公園の木に突っ込んだ。

山男の体当たりを食らった木はポツキーの如くへし折れた。アレを食らったらマジ死ぬな。

「天宮さん、俺に戦わせてください」

「大丈夫ですか奥村さん？」

「まあ任せてくださいって」

実はここの特訓をしていた。

レアリアの使い方を知るため。

まあ死にたくないからな。

そして結構使い方が分かって来た。

「行くぞ山男」

「山男じゃない、ゴンだ」

その巨体でなんて愛らしい名前なんだ。笑えるよ。

「行くぞゴン！」

「こい奥村！」

俺の名前が何故かバレてる。

ああ、さっき天宮さんが俺の名前を呼んだからか。

俺は叫ぶ。

自分の武器の名を。

「ジオフリード！」

天に掲げた手の中にあの暗い色をした巨大な槍が現れた。

「そいつがお前のレアリアか……」

「ああ。そしてこいつの名前はジオフリード。今からお前を倒す武器の名だ」

「ははっ、やってみな！」

「言われなくても！」

——アタッカースタンス

途端、槍はさらに巨大化した。

約3・5メートル。俺の身長の2倍程ある。

その槍は暗さを増し、夜の公園に異彩を放っている。

「くらええ！」

俺はゴンに突っ込んで行く。

ジオフリードの使い方は分かったが戦い方はまだ知らないのととりあえず突っ込む。

「そおらよっと」

ゴンは背中から斧を出した。

大きさは俺の身長半分程。ゴンには少し小さめに見える。

俺の槍がゴンの斧に接触する。

そしてなぎ払われる。

「そんな温い攻撃で俺を倒そうと？」

「こんなもんじゃねえさ」

アタッカースタンスは超攻撃型。破壊力に長けたスタイルだ。

「ほら、まだまだ行くぞ！」

再び突っ込む。

「同じ手で来るとは俺もナメられたものだ……死ね！」
ゴンは大きく斧を振りかぶった。

——同じ手じゃねえさ。

ゴンが斧を振りかぶった刹那、俺はゴンの真上に跳んだ。
「何ィ!?」

そのまま重力に任せた攻撃をだした。
恐らく腕の一本は持っていけるだろう。

だが予想は外れた。
ゴンの右肩に突き刺したジオフリードはそのまま貫くことなく刺さっていた。
傷は浅い。

「甘く見たな奥村。俺は生まれつき体が丈夫なんだよ！」

そんな理由あるかー！
何か他の理由があるはずだ。こいつにジオフリードが貫通しなかった理由が。
一体……

「奥村さんが未熟だからですよ」
後ろの方から天宮さんの声が聞こえた。
「まだレアリアを完璧に使いこなせていません。だから貫けない

んです。奥村さんがそれを使いこなせていれば恐らく今の一撃で山男さんの右腕は落ちていたでしょう」
確かに……ってか実践経験が少ないから使いこなせないのは必然なのでは。

「まあ見ててください。私が戦い方を……」
「待って下さい天宮さん」

天宮さんの後ろで剛が言った。
見ると剛の両の手は輝いている。

「森野さん……あなた」

「ええ、やはり俺の守りたい人は女菊です。女菊のために……戦います。戦わせて下さい」

「……わかりました」

天宮さんが左に退く。

そして剛は俺のところに来た。

「楓、俺の最強っぷりを刮目せよ」

俺の肩を2回叩くと剛は誇らしげに言った。
まだ武器がわからないのになんという自信だ。尊敬するぜ。

剛が天に両手を掲げる。

剛の手の中で増した光が夜の公園を眩く照らす。

「来い……俺のレアリア！」

そして剛の手の中に現れたのは刀。

銀色に輝くその刀は光り輝いていて俺のや天宮さんのとは違った存在感を放っていた。

長さは1.8メートルと言ったところだろうか。

内1.3メートルは刃。

鋭く空間をも切り裂きそうなものだった。

「こいつが俺のレアリア……」

剛が目を見開いて刀を見つめる。

「そう、それが森野さんのレアリアです。名前は後で……」

「決まりました！ こいつの名前は『大赦憐』です！」

決めるの早！

俺のジオフリードでさえ3日懸かったのに……

ちなみにジオフリードはカッコ良さそうなカタカナを考えたただけで意味は無い。

「行くぞ山男お！ 試し斬りだぁ！」

剛はなんのためらいもなく突っ込んで行った。

ここら辺が俺と剛の違いなんだろう。

初めての実践で躊躇なく敵に突っ込むなど俺には出来なかったことだ。

突っ込んで行った剛はゴンの斧と刃を交えていた。

恐らくこのままでは剛の大赦憐が折れるだろう。見た目からもわかるがパワーが圧倒的に違う。

スパツ。

なんとゴンの斧が斬れた。

「んな……」

「まだまだ行くぜえゴンさんっ！」

そのまま剛はゴンの懷へと入った。

そして脚・腹・腕を斬りつけた。

ゴンの身体から鮮血が吹き出す。

「そしてくらえ！ 奥義・百過^{ビヤツカリヨウラン}獵嵐！」
奥義まであるよ……

そして剛は一度ゴンから離れ、刀を肩口へ寄せた。
そして再度突っ込んだ。

ポスッ。

剛の大赦憐が消えた。

手の中から突然。

そのせいで剛はゴンの腹を殴る形になった。

「なんか知らんが運が悪かったみたいだな！」

ゴンは叫ぶとともに右拳を振り下ろした。

しかしゴンの拳が剛へ届くことはなかった。

「ご苦労様です森野さん」

剛に向けそう言い放った天宮さんの手には大層な斧・ストンベルダ

が握られていた。

これでゴンの右腕を切り落としていたのだ。

「ぐあああっ！ 俺の右腕がああ！」

ゴンは右腕を押さえ叫んでいる。

「森野さん、力が目覚めて良かったですね。 今日からは奥村さんのように鍛えてくださいね。 じゃないと今みたいに急にレアリアが消えかねませんから」

「……すいません」

剛は結構覇気を失っていた。

急にレアリアが消えたことによる驚きなのか、天宮さんの手を煩わせたことによる不甲斐なさなのか。 っていうか何故天宮さんは俺が密かにトレーニングしてたのを知ってるんだ。

「この……許さんぞ天宮あ！」

ゴンが怒声を上げる。

残った左手にはいつの間にか斧が握られていた。

先程剛が斬ったはずだが。

「その斧の能力ですか」

「そうだ。 この斧はいくら破壊されようとも再生が可能だ。 さらに！」

ゴンは左手に持った斧を掲げると何やら力を込め始めた。

するとその斧はみるみる内に大きくなり、ゴンと同じ大きさになった。

「はははっ！ これで先程までとは破壊力が段違いだ！ 粉々になっ
つてしまええ！」

ゴンが斧を振りかぶる。

目標は天宮さん。

「危ない天宮さん！」

俺は叫んだ。

「大丈夫ですよ奥村さん。それより危険ですから離れていてください」

俺は天宮さんからとてつもなく危険なオーラを感じ取った。

そして天宮さんがストーンベルダを後ろに大きく引き、構えた。

——ヒューヂパニツシユメント

すると公園に波紋のように衝撃が伝わり、木々を吹き飛ばす。

天宮さんが放ったその一撃で全てが決まったようだ。

ゴンの身体が二つに裂かれ、上半身だけがもがいていた。

「テメエ……いつかぶっ殺してやる……全身バラバラにしてやる……」

ゴンが掠れた声で天宮さんに言う。

するとゴンは黒い炎に包まれていった。

跡形が無くなるまでそんな時間はかからなかった。

……天宮さんを怒らせると怖いかもしれません。

「最後の黒い炎も天宮さんの力なんですか？」

剛が天宮さんに問い掛ける。

「ええ、私の斧には切った対象物を燃やす力があります。その炎にはまた種類がありますが」

天宮さんは肩の埃を払うようにしながら答えた。

「しかし天宮さん」

俺は気になって止まないことを聞いてみることにした。

「この公園……どうするんすか？」

見渡せばそこは荒れ地と化した元公園。

木はなぎ倒され、地面は抉れ、砂場は砂が無くなっている。

「ああ、これは本部の方がなんとかしてくれますよ、きっと」

「きつと、ですか」

俺と剛は笑ってしまった。

「では、ここは本部とやらに任せるとして、帰りますか。うちに」

はかわいい妹がいるので早く帰らないと」
俺たちは皆して笑っていた。
夜の公園に3人の笑い声が響いた。

第四話：愛らしい名の山男（後書き）

注意・コメント・感想など

おっしゃっていただければ幸いです。

酷評もどしどし受け付けております。

第五話：白い彗星のシア？（前書き）

遅書で誠に申し訳ございません。

サボり気味だったもので……

次からはちゃんと頑張って書きますのでよろしくお願いします。

他の連載は多分当分おやすみになりますが。

第五話：白い彗星のシア？

冬から春へと季節は移り変わり、寒さに凍える人も減って来た。まあ今年はもともと暖冬だから凍える人は少ないかもしれないが。

寒がりの妹は春になったことに喜びを感じているようだ。

「春はいいよねえ。寒くないんだもん」

妹はリビングのソファで猫のように丸まって寝ながら言った。

「陽子、時に俺は昼飯を食べたいのだが」

「もうちょっとのんびりさせてー」

「仕方がない。今日の昼飯は俺が……」

「今すぐ作ります」

そう言うのと陽子はスツと立上がり、愛用のエプロンを着けて、キッチンへと行った。

「やれやれ、そんなに俺の料理が嫌かね」

さて、今は学年末試験も終わり春休みだ。

俺は家でのんびりし、試験の結果を忘れたかのように極限までだらけていた。

最近は未来人の攻撃も（俺の知る限りでは）無く、なかなか平和な日を過ごしていた。

でもいつの時代も大抵平和なんてものは唐突に乱されるものである。

ピリリリリ。

着信だ。

メールじゃなく着信だ。
ということは急ぎの用事ということかもしれない。
嫌な予感がする。

ピッ。

「はいもしもし」

「おう、楓か」

「そりゃ、お前が俺の携帯にかけたんだから俺以外がでたらミステリーだよ」

「ははっ、確かに」

「で、なんか用事か」

「ああ、そうそう。今から遊びに行こうぜ」

「はあ？ どこに」

「最近出来た水族館『オーシャンパライス』だ」

「今更水族館なんて……」

「天宮さんをすでに誘ってある」

「よし、現地集合か？」

「ああ、じゃあそういうことで」

「わかった、じゃあな」

ピッ。

なんだ、ただの遊びのお誘いか。心配損だ。

しかし、天宮さんが来るとなっちゃ行くしかねえだろ。
たとえば天地がひっくり返ろうともな。

「陽子、俺ちょっと出かけて来るわ」

「どこに？」

「最近出来た『オーシャンパライス』ってところ」

「私も行きたい！ どうせ森野さんでしょ？」

「プラス女友達だ」

「じゃ、問題ないわね」

「……まあちょっと待て」

剛なら陽子が来ても問題無いと言うだろうが、天宮さんはどうだろう。

もしかしたら、いや、天宮さんに限ってそんなことないだろうけど、もしも天宮さんが子供嫌いだったらどうしよう。

一応確認しとくか。

ピッピッピッ。

プルルルル。

ガチャ。

「はい、天宮です」

「もしもし、奥村ですけど」

「あ、はいこんにちは。奥村さんは今日、水族館行けるんですよね？」

「あ、はいそれは問題無いんですけど、ちょっと別の問題が」

「なんですか？」

「実は俺の妹と一緒にきたがってですね」

「別にいいじゃないですか」

「あ、いいですか？」

「ええ。私子供大好きですし」

「ああ良かった。わかりました。ではまた後で」
ピッ。

やはり天宮さんは子供嫌いではなかったか。良かった良かった。これで陽子を連れていける。無駄なお土産を買ってこなくて済む。

「陽子、お前も行って良いってよ」

「やったー！　じゃあ着替えなきゃ」

妹は自分の部屋へ走って行った。
さて、俺も着替えるかね。一応かっこつけてかなきゃな。

そして俺と陽子はオーシャンパライズに着いたわけだが、剛も
天宮さんもない。俺ら結構時間かったのにな。

「遅かったな楓」

「あれ剛？ どこにいたんだ」

「トイレだ。お前があまりにも遅いから」

「そうか、すまん。天宮さんは？」

「まだ来てないっぽいな」

そうか、もしかしたら天宮さんは時間にルーズな人なのかもしれな
いな。

それはそれでいいんだが。

「森野さんこんにちはー」

「おー陽子ちゃん、大きくなったなあ」

陽子にとって剛は第二の兄貴……いや、おじさんみたいなもんだな。
陽子もよく剛に懐いたもんだな。

「すいません遅れてしまって」

後ろから聞こえた声に反応して振り返ると、そこにいたのは紛れも
なく天使、いや女神だ。

全体的に白っぽい服で、正しく清楚な天宮さんにはぴったりだ。
髪もまとめてあり、いつも学校で会う天宮さんより大人っぽさ溢れ

る感じだ。

「……綺麗です天宮さん」

思わず口から率直な感想が漏れた。

「ありがとうございます」

天宮さんに会えて本当に良かった。これほど美しい人に会えたことを、俺は神に感謝しよう。

「奥村さん、こちらが妹さん？」

「あ、はい」

「初めまして、奥村陽子です。兄がいつもお世話になってます」
陽子が年齢不相応な丁寧過ぎる挨拶をした。

「天宮真理です。こちらこそお世話になってます」

天宮さんも負けないくらい丁寧な挨拶だ。さすがと言ったところか。

「じゃあ入りますか」

「おー！」

入場料を払い、俺らは水族館へと入っていった。

「お兄ちゃん、ヒラメだよ！」

「カレイだな」

「お兄ちゃん、シャチだよ！」

「イルカだな」

俺は妹の間違った認識をことごとく訂正していった。
シャチとイルカは間違わないだろ、普通。

「君の妹は実に楽しそうだねえ」

ガラスの水槽に興味津津の陽子を見ながら剛は言った。

「まあ小学生のうちだけだからな、水族館を楽しめるのなんか」

中学生、高校生となったらこんな純粹に楽しめることなんか無くなってしまうのさ。

だから今は楽しめよ、陽子。

「水族館というのは楽しいですね、奥村さん、剛さん」

高校生にもなって水族館で楽しめる人がいました。

そんな貴女は素敵です。

「あ、奥村さん、シジミですよ！」

「ヒトデですね」

どうやって間違えたんだこの人は。

……そういえばこの人は天然だったな。忘れてた。

「おい楓、向こうサメコーナーだってよ！ 見に行こうぜ！」

ここにも楽しんでる人いたよ。

お前、高校生にしてははしゃぎ過ぎじゃないのか。

ま、楽しい分にはいいけどさ。

で、サメコーナー。

なんともデカイ水槽だ。都心のビルくらいあるんじゃないか。

いや、もちろん冗談だけどさ。

「やべーサメかっけー！」

「水族館でここまでハイになれるお前が羨ましいよ」

「え、なんか言ったか？」

「……なんにも」

でも確かに魚類の中ではかっこいいのだろう。

巨大な体に鋭い牙、勇ましい泳ぎ。

このサメの雄々しき姿を見ると、若干恐怖を感じる。

俺サメには勝てる気がしねえよ。ジオフリード使っても勝てる気しねえよ。

パリン。

突然サメの入っている水槽が割れた。

割れたところから水が流れ出て、そしてサメも流されるように出てきた。

突然の出来事に人々は惑い、辺りからは悲鳴が聞こえる。

「剛！」

「ああ！」

「逃げるぞ！」

そして俺たちは全力で逃げ去ろうとした。

すると、前方から人の波に逆らって、陽子と天宮さんがやって来た。

「お兄ちゃん！ 何があったの？」

何も事情を知らなそうな陽子は心配そうな顔で俺を見てきた。

そのとき、逃げ出したサメのうちの1匹が陽子へと襲いかかった。

「陽子！ 危ない伏せろ！」

サメの鋭い牙が剥き出しになり、陽子へ襲いかかる。

「危ない！」

天宮さんが陽子を抱いて横へ跳んだ。

サメは勢い余って壁にぶつかっていた。

俺はすぐに陽子の下へと駆け寄った。

「陽子、陽子！」

陽子は俺の呼びかけに反応しない。目を瞑ったままだ。

「大丈夫でしょう。気絶してるだけだと思います」

天宮さんが陽子の頭を撫でながら言った。

許さない。

陽子をこんな目にさせたこのサメを……

「ぶっ殺す！ 目覚めろジオフリードオオ！」

天へとかざした俺の手が輝き、光が巨大な槍を象っていく。

そして、空間を吸い込むような深い漆黒の槍、ジオフリードが姿を現した。

「奥村さん。殺さないようにお願いします」

「わかりました。死なない程度にぶっ殺します！」

「ほんとにわかってますか？」

いくぞサメども。

俺のかわいい妹を傷つけた罪は重いぞ。

でも天宮さんには殺すなといわれてるから、とりあえず半殺しだ。覚悟しろよサメどもめ。馬鹿みたいな顔しやがって。

——クイックスタンス

ジオフリードモードチェンジ。

俺の槍は細くなり、そして軽くなった。

つまりスピード特化のモードということだ。

「死ねえサメども！」

俺は掛け声とともに駆け出した。

細長い俺の槍は1匹2匹と殺さない程度に突き刺していった。

電光石火のスピードですべてのサメを貫いた。まあ10匹程度だし。

「ご苦労様です奥村さん。レアリアにも慣れてきましたね」

「まあ2、3ヶ月戦ってますからね。サメ10匹ごとき5秒ですよ」
「かっこよかったですよ」

「そうですか？ ありがとうございます！」

逃げようとしていたことは内緒にしておいたほうがよさそうだ。

「はーっはっは！ なかなかやるようだねホルダーの諸君！」

声は後方から聞こえた。そして振り返ると水族館に設置してあるスピーカーの上に声の主はいた。

そこには短めの金髪で、ふち無しの眼鏡をかけた、いかにも研究者っぽい白衣の男が立っていた。

「誰だお前！」

「俺の名前はシーア。察しの通り未来人だ。さて、会って早々だけど死んでもらおう！」

すると、シーアと名乗るその男の下壁が轟音とともに砕け散り、何かが現れた。

それは巨大なロボットのように見える。そのロボットはまるで昆虫……いくなればカマドウマのような形をしていた。

シーアは飛び降り、そのロボットの操縦席とみられる場所に座った。

「見せてもらおうか。レアリアの性能とやらを！」

そう言うと、そのロボットは四足歩行で動き出し、1つの足を振

り上げた。

そしてその足を振り下ろしてきた。踏み潰そうというのだろうか。

だが、遅い！

俺はすかさず横転し、そのロボットの攻撃を避けた。

「俺たちと天宮さんとのデートの邪魔しやがって……さっさと片付けさせてもらおうぞ！」

——アタツカースタンス

攻撃型へとモードチェンジしたジオフリードは、その深い黒さを強めながら巨大化した。

あのロボットの足を壊せば恐らくバランスを失い、戦えなくなるだろうな。

つまり、足を壊せば勝てる。

「死ねカマドウマロボット！」

俺は渾身の一撃をそのロボットの4本ある足のうちの1本にかました。

この攻撃で折れないはずがない。

ジオフリードは世界が壊れんばかりの轟音と共にそのロボットを貫いた。

はずだった。

しかし、目の前には無傷のロボットがいた。
つまり、俺の渾身の一撃が効かなかったということだ。

「バカな……」

「なんだ。ホルダーの力はそんなものか。興冷めだ、死ね」
再びロボットの足が振り上げられた。

俺の攻撃が効かない。

足が全く動かない。

勝てない。死ぬ。

「楓危ねえ！」

その声の主は踏みつぶそうとしているそのロボットの足を刀一本で抑えている。

「剛、お前……」

「らしくねえじゃねえか楓！ お前はいつもバカみたいに突っ込んで、考え無しに戦ってんだろ。なのに今回たった一発攻撃が効かなかっただけでヘタレ込むのか、情けねえ」

そうだ。

何俺は怖じ気付いてるんだ。
たった一発の攻撃が効かなかっただけの話。

何を怯える必要がある。
それに俺は一人じゃない。

「2人でやればなんとかなるだろうよ」

「……そうだな」

「じゃあ、いくぜ楓！」

「おう！」

そう言うのと剛は、刀に力を込め、ロボットの足を押し返した。
下からの2人同時攻撃なら効くかもしれない。
いくぞ。

「くらえカマドウマロボット！」

剛の大赦燐の斬撃と俺のジオフリードの突きの同時攻撃。
その衝撃は凄まじいものだった。

ロボットの足に亀裂が入った。

恐らく崩れるだろう。

俺と剛はバランスが保てなくなり崩れた。

これで動けまい。

「ちっ……今日は退いといてやるよ」

シアはいつの間にかロボットから降りていた。

「認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものを」

そういうとシアはロボットが壊した壁から逃げていった。全力疾走で。

「ふう、なんとか追っ払えましたね」

剛は言った。

「といつても逃がしてしまつたがな。」

まあなんとか被害者を出さずにすんだし、とりあえずいっか。
しいていえばサメは半死状態だがな。

「ところで天宮さんは何故戦わなかつたんですか？」

「陽子さんを守らなければなりませんでしたし。それに私が戦つたら水族館が壊れちゃいますから」

ああ、成程。

いつぞかの公園で放つた一撃を室内でやられたら、まあ多分水族館は更地になるだろうな。

……んっ……」

気絶していた陽子は目覚めると、ゆっくりと体を起こした。

怪我でもしたのだろうか、腕を抑えている。

「あれ、お兄ちゃんサメは……っていか何この惨劇」

陽子は壊れた壁、ひび割れた床を見て目を丸くしていた。

「正義のヒーローが悪者をやつつけた後さ」

「え？」

あながち嘘ではないはずだ。

俺は、お前を守る正義のヒーローさ。

第五話：白い彗星のシア？（後書き）

剛「なあ楓」

楓「なんだ剛」

剛「この小説なんかの漫画に似てないか？」

楓「漫画？」

剛「確か武装錬き…」

楓「気のせいだ剛！作者も最近気付いたとかそんなこと絶対ないから！」

剛「俺の名前もなんか似てるような…」

楓「気のせいだ！！！」

第六話：桜は人を惑わせる 前編（前書き）

正直、失敗したと思っています。
でも後悔はしてません。

第六話：桜は人を惑わせる 前編

「花見だー！」

声高々に剛は言った。

今日は剛の言ったように花見である。

俺と剛と天宮さんと陽子の4人で来ている。

この間の水族館はあの研究者っぽいのが邪魔したからあまり楽しめなかったが、今回は問題無い、と思う。

とりあえず未来人が襲って来なければ楽しくなること間違い無しだ。

剛が謎のつてで一番いい場所を取ってくれたから、ほらこんなにも大きな桜の木が目の前に。

「わー綺麗」

陽子は目の前の大きな桜の木を見ながら言った。

「ではとりあえず乾杯しましょうか」

そう言って天宮さんは皆に紙コップを配り始めた。

「えーっとお飲み物は……」

「天宮さん大丈夫です！ ここにあります！」

そう言って剛が出したものは年季が漂うボトルのような、ってまさか……

「剛、それって……ワインか？」

「ご名答！ 20年ものの赤ワイン。これは高いぜー」

「ちよっと死んでこい。俺らは良いとして、陽子は流石に無理だ」

陽子はまだ10歳、つまり酒を飲める年齢までは今の倍の年齢が必

要だ。

まあ俺らも飲んで良い年齢ではないが、まあ耐性はとりあえずはあるからな。

「大丈夫だよお兄ちゃん。私も子供じゃないんだし」

「いや、十二分に子供だよ」

体型とかも含めて。

大人ってのはこの清楚で美しく且つナイスバディな天宮さんみたいのを言うんだぞ。

お前は美しくじゃなくてかわいいだから、残念でした。

「お兄ちゃん私飲みたい。実はとってもお酒飲んでみたいの」

「とは言っても……」

「お兄ちゃんの机の一番したの引き出しの中にあるもの、天宮さんに黙っというてあげるから」

「よーし陽子も飲め飲めー」

「やったー！」

ちくしょう陽子の奴、いつの間に俺の秘蔵物を見つけたんだ。

まあよりアブノーマルな本は別の場所に隠したから見つかって無いだろうから、まあよしとしよう。

「よーし陽子ちゃんも飲め飲めー」

剛は俺と陽子の紙コップにワインを注いだ。

紙コップにワインとは、なんともアンバランス、そしてミスマッチ。

「天宮さんどうぞ」

剛は天宮さんのコップにワインを注ごうとした。

しかし、天宮さんはコップを引いた。

「あの、私、実は、お酒、ダメで、飲むと、大変なことに……」

「大丈夫ですよー。ほら飲んだ飲んだー」

断る天宮さんを気にせず、剛はワインを注いだ。天宮さんは物凄く焦っているように見える。本当に大丈夫だろうか。

「えーでは、なんとなく桜が綺麗でおめでたいので、乾杯っ！」

「乾杯ー」

皆紙コップを突き上げた。

そして一気に飲み干した。

ああ、確かにこれは美味しい。ちょうどいいくらいの酸味だ。

これならいくらでも飲めてしまうんでは無いだろうか。

高い酒だからたくさん飲んでおう。

そして次の瞬間、吹き抜ける風の音と共に天宮さんが倒れた。紙コップを持ったまま。

「天宮さん大丈夫ですか！」

俺は天宮さんを揺すりながら声を掛ける。

顔が真っ赤だ。もしかして熱だろうか。

「……にゃあ」

「にゃあ？」

おかしいな、今天宮さんの口からおかしな言葉が聞こえた気がしたぞ。清楚で美麗で端麗で真面目な天宮さんが、まさか、ね。

「天宮さーん、大丈夫ですかー」

「奥村さぁん……私……暑いにゃあ……」

聞こえた。

今何か聞こえたぞ。

天宮さんの口から出るはずのない言葉が。

まさか幻聴か？ 若気が至りに至って幻聴まで聞こえるようになったのか？ ならマズい。

よし、再確認だ。

「あの、天宮さん、今なんて言ったんですか？」

「だあかあらあ……暑いからあ……脱がしてえにゃあ……」

これは……

「剛」

「なんだ」

「脱がしていいと思うか」 「ダメだ」
だよな、うん。

正直な話、今の俺の理性はやばいことになっている。
現状を理解した俺自信もかなりやばい。

抱きたい。

出来るなら今すぐ抱いて、人目を気にせず色々とやってしまいたい。
だがダメだ。

それはなんというか、この小説が青少年の読めない内容になるし、
それにだ。

陽子が見てるからダメだ。

天宮さんと同じくワインを一杯飲み干した陽子は全く酔ってる様
子は無く、むしろ俺と天宮さんを見てニヤニヤしてる。
すっげえニヤニヤしてる。

「剛」

「なんだ」

「俺はどうすればいい」

「とりあえず落ち着かせろ。でないと俺もやばい」

「わかった」

平静を装った顔をしている剛は、確かに物凄くやばそうだ。

拳に力が入ってるなんてもんじゃない。

恐らく天宮さんがもう1アクション起こしてしまったら俺同様剛も
アウトだろう。

「あの、天宮さん」

「にゃあ？」

つらい。

そしてこの天宮さんの赤面した顔、少し着崩された衣服。

やばい、鎖骨のラインが丸見えですよ！

てか谷間が丸見えですよ！これはマズい！

「あ、あの、ですね、天宮さん？ と、とりあえずちゃんと、ふ、

服を着ましょう」

「やあだあ！ 暑いにゃあ！」

そういうと天宮さんはさらに前のボタンを外していった。

……ってマズい！

これは本格的にマズい！

俺はボタンを外している天宮さんの両手を掴んだ。「ダメです天宮さん！ ここは公共の場所です！」

「はーなーしーてーにゃー！ 暑いにゃあ！」

「じ、じゃあ何か冷たい飲み物買ってきますから。剛、大急ぎで水」
「わかった」

剛は全速力で駆けて行った。

急げ剛。全てはお前の脚にかかっている。

目の前には白い天宮さんの胸が見えている。

純白のブラジャーまで見えている。

ああ、ここが自室でなくてよかった。自室ならば俺は歯止めがきかずに青少年が読めない内容になっていただろう。

てかどうしよう。

「はーなーしーてーにゃー！」

めっちゃ天宮さん暴れてるんだけど。

このままでは剛が来るまで保たない。どうにかしなければ。
た、助けてドラ○もん！

「はい、天宮さん落ち着いてー」

陽子がどこからともなく団扇を出し、天宮さんを扇ぎ出した。グツ
ジョブマイシスター！

次第に天宮さんも落ち着いて来て、どうにか動きが止まった。

「あ、ありがとう陽子」

「公共の場所だからね」

この際その団扇がどこにあったのかなんて聞かないさ。

「楓ー、水買ってきたぞ！」

剛が全速力で帰って来た。

めっちゃ息切らしてるじゃん。大丈夫か剛。

「ああ、ありがとう」

俺はゼエゼエ言っている剛から水を受け取った。

「はい、天宮さん。水です」

俺が天宮さんの前に水を差し出すと、天宮さんはそれを静かに飲み出した。

とりあえずは落ち着いたみたいで良かった。

「……眠いじゃあ」

「え？」

すると天宮さんはなんと俺に抱き付いてきた。
そしてそのまま押し倒されてしまった。

天宮さんの豊満な胸がモロにあたる。やべえすつげえ柔らかい。

「あの一、天宮さん？」

「……すう」

天宮さんは小さく寝息をたてていた。

「ちくしょう、楓め、一人だけ良い思いしやがって……」

まだ息を切らしている剛は俺を睨みながら言った。

「天宮さん寝ちゃったね」

陽子は倒れている俺を見ながら言った。

覆い被さっている天宮さん、少し重いんだけど。

胸が大きいからだろうか。

「じゃ、お兄ちゃんは天宮さんを起こさないようにね」

……え？

ってことは俺この状態から動くなと？

いや確かに幸せな体勢だよ。

顔の真横で天宮さんが寝息たててるんだもん。

しかも胸あたってるんだもん。

でも公共の場所での体勢はいささかよろしくない気がする。

「剛さん、私色々作ってきたから食べましょう」

「いいねえ。おっ美味そう」

ちょっと、俺放置か。

いや確かに幸せな体勢だけど。
ちよつと……マジかよ。おーーい、誰かー。
助けてくれー。

その後、俺は1時間公衆の面前で天宮さんに押し倒された体勢の
ままだった。

第六話：桜は人を惑わせる 前編（後書き）

一応前編です。

第七話に続きます。

第七話：桜は人を惑わせる 後編（前書き）

更新に時間がかかってしまいました。すみません。

第七話：桜は人を惑わせる 後編

「お恥ずかしい姿を……本当にごめんなさいなさい！」

天宮さんは土下座している。やり過ぎではないだろうか。

「いえ、良いものを見させていただきました。なあ剛」

「ええ、今までに見たことのない天宮さん、美しかったですよ」

謝罪している天宮さんの顔は酔っている時のそれよりも真っ赤だった。

天宮さんの痴態、もとい新しい側面を垣間見た後も俺たちは花見を続けていた。

しかしそろそろ終えるべきだろうか。

別にこのまま夜までいて夜桜を見るのも一興だが、陽子を夜まで外にいさせるのは危険な気がする。

まあなんにしろ酒も食い物も減って来たから終わらざるをえないか。

周りにはまだたくさん人がいて、バカみたいに騒いでいる。

一気飲みをする人、川へ飛び込む人、爆睡する人（天宮さんもさっき爆睡してたし）といろんな人がいる。

ああ、平和だなあ。

でもきつと平和なんてものは唐突に破られる。

だからとりあえず気を緩めないようにしなければ。いつ未来人が襲ってくるか分からんからな。

「あの、奥村さん？ やっぱり……怒ってますか？」

天宮さんが泣きそうな目でこちらを見ている。

「いえ、むしろ楽しかったです。疲れましたけど」
本音だ。

「本当に申し訳ございません……」

「まあでも確かに恥ずかしい姿ではありましたね」

「ううっ……」

天宮さんは俯いてさらに赤くなった。

うん、気緩めていんじゃないね？

今は目の前の天宮さんの表情を網膜に焼き付け、永久保存だ。

いやあ、天宮さんにもあんな面があるんだなあ。

また今度酒を飲ませよう。

「あ、剛と楓だ」

俺は声がした方向、すなわち俺の背後へ振り返った。

そこには昔の馴染みがいた。今ではただの……

「……女菊か」

「久しぶりー！ 元気にしてたあ？」

「……」

この女、俺にあんなことしたくせに今更『元気にしてたあ？』はな
いだろ。ふざけるな。

あの日の忌まわしき記憶は高二になった今も忘れねえぞ。

そういえば剛は昔から女菊のこと好きだったな。
どんな反応なのだろうか。

「よ、よお、め、女菊」

「おひさー剛ー」

メツチャガタガタだよ。

久しぶりに会ったからって緊張するかよ。

俺は苛立ちしか感じないというのに。

「……帰れよ」

「え？」

「帰れって言ってるんだよ」

「おい楓、何言ってる……」

「そいつが何やったか忘れたのかよ！」

あの日、俺は裏切られた。

いつまでも続くと信じていた絆が切れた瞬間。

あの日、あのバレンタインの日。

「女菊がやったこと？」

「こいつはあのバレンタインの日……俺を陥れた」

そう、あの日。

いつもと大差のない放課後。

いつもと違うのは男子の反応。

バレンタインデー。

俺と剛はモテなかったので、毎年幼馴染みの女菊からしか貰えていなかった。

でも、あの日だけ。

あの日だけはあいつは俺を裏切った。陥れた。

「甘いチョコしか食えない俺に……ビターチョコを渡しやがったんだぞ！」

普通の人には大したことではなくても、俺にとっては死活問題なのだ。

ビターチョコを食べると、俺は3日間鼻血が止まらなくなる。だから甘いチョコしか食べれない。

それをあいつは知っていてビターチョコを俺に渡した。これは嫌がらせ、もしくは自殺の境地に立たせようとしてるに違いなかった。

「ああ、なんだあれか」

女菊は笑いながら言った。

「ごめんね？　実はあのビターチョコ、剛にあげるやつだったのよ」

「……へ？」

何がなんだかわからない。どういうことだ。

「剛がビターチョコ欲しいっていったからビターチョコ作ったのよ。でも、渡す時に入れ替わってたみたいなのよね」
尚も笑いながら言った。

「ああ、だから俺のチョコはあんなに甘かったのか」

剛は何故だか照れながら言った。

……つまりだ。

あれは悪意があってやったのではなくて、過失、ということなのか。

「わざと、じゃなかったのか？」

「当たり前じゃない！ 私がわざわざそんなことするわけないですよっ」

確かに。

よく考えれば分かることかもしれない。

別にいざこざがあったわけでもないのだから、俺が女菊に恨まれる理由はなかった。

なのにわざわざ嫌われるようなことをするだろうか。

……なるほど。

つまりは『すべて俺の勘違いだった』ということか。

「女菊」

「ん、何？」

「……本当にすみませんでした」

女菊は悪いことしてないのに、一方的に俺が嫌ってしまった。心の底から謝ろう。

「いいよ。私も悪かったんだし」

満面の笑みで女菊は言った。

「んじゃあ、仲直りしたところで花見再開だー！」
剛が急にテンション上げ始めた。

「残念ですか森野さん、食料も飲み物も無くなってしまいました」
天宮さんがお開きを告げた。
飲食物無しじゃ花見何て出来ないからな。基本『花より団子』だしな。

「あれ、真理ちゃんじゃん」

女菊は天宮さんを見ながら言った。

「お久し振りです」

「わー奇遇ねー」

女菊と天宮さんが物凄くフレンドリーに話している。

「あの、お二人はどのような関係で……」

剛が恐る恐る聞いた。

天宮さんはフフツと笑い答えた。

「森野さん、奥村さん。彼女はホルダーですよ」

「……えー！ー！ んなばかな！」

俺と剛はハモってしまった。

寝ている陽子を隣りにして、俺たちは今日最大級の大声を出してしまった。

第七話：桜は人を惑わせる 後編（後書き）

次こそは早目の更新を…

第八話：春の終わりの部活見学（前書き）

時間がかかってしまいました
が
今回は自信があります！

第八話：春の終わりの部活見学

「ふう、疲れた」

今日もようやく授業が終わった。

皆さん、お忘れかもしれないが俺は神命高校に通う高校2年生だ。一応学校に毎日足を運んでいる。

窓の外を見ると、綺麗なピンク色の桜も葉桜に変わり、少し味気が薄くなってきた。

「天宮さん、お疲れ様です」

ホームルームが終了した直後、俺は真っ直ぐに天宮さんの席へ向かった。

「奥村さん、弓道部行きませんか？」

突然の天宮さんのお誘いに俺は戸惑った。

いや、天宮さんに対して俺は最早心の下僕なのだから行かないわけないのだが、問題は何故弓道部に行くかだ。

「なにか用でもあるんですか？」

剛が腕を組みながら聞いた。というかお前いつからいたんだよ。

「いえ、まあ行けば分かると思いますので、森野さん、奥村さん、行きましょう」

抗うこともせず俺たちは雨宮さんに導かれるまま弓道部へと出向いた。

実はこの神命高等学校は武道が盛んな学校で、結構頻繁に優勝をもぎ取ってくる。空手や柔道や剣道や合気道、そして弓道部。中で

も弓道部は素晴らしい成績を収めてるらしく、なかなか人気がある。
なのでうちの学校の弓道場もかなり広い。

目の前で見るとそうとう広い。

敷地内にあるとはいえ、校舎の裏側にあるので帰宅部の俺には無縁の場所だったので、間近で見たのは初めてかもしれない。

深い緑に囲まれたこれは、一際目立つ異彩を放っていた。俺たちなどお呼びでないかのごとく。

「では、入りましょうか」

天使の微笑を受け取った俺たちは弓道場の扉を開けた。

道場というだけあってなかなか重い扉だった。決して俺が非力なわけではないはずだ。きっと剛が非力なんだ。

「頼もーう！」

「お二人とも、道場破りじゃないんですから……」

天使の苦笑を受け取った俺たちは神聖なる地へと足を踏み入れた。

目の前に映っている光景はやはり普段の俺たちには無縁の、ピンと張った糸のように緊迫していて、気が緩む隙が無かった。

俺は弓道のことはサッパリわからないが、今弓を構えている人は、命のやり取りでもしているかのように張り詰めていた。

張り詰めた空気を破るようにして、その人は矢を放った。

彼女の放った矢は見事に的のど真ん中に命中した。

「スゲェ……」

驚きの余り感嘆の声を漏らした。

あの女、きつとそうとう弓道が上手なんだろうなあ。サッパリわからないけど。

パチパチパチ。

静かな道場内に小さな音が広がる。ふと横を見ると天宮さんが拍手をしていた。

パチパチパチ。

俺と剛もつられるように拍手をした。

先ほどまで張り詰めた空気の中にいた女性がこちらでへ振り返った。

「あら、ありがとう」

こちらに振り返ったその女は、やけに見知った顔だった。

肩まで伸びた月明りのような金の髪、若干小麦色めいた肌、控え目な胸。

あれはまさに……

「……また女菊」

「なによ『また』って」

「読者のには『また』なんだよ」

「意味分かんない」

「わからない方がいいさ」

先ほどから矢を射っていたのは女菊だった。

がさつな口調の女菊には余り弓道は似合わない気がするんだが。

まあ胸が無いぶんやりやすいのかもしれない。

「安澄さん、お見事でした」

「真理ちゃん、ありがとうー」

手を振りながら女菊は答えた。

弓持ったまま手を振るって危ないんじゃないのか？

「女菊、お前部活何時までだ」

剛が女菊に歩み寄りながら聞いた。

「6時だけど」

「よし、待とう」

剛の安易な口約束によって俺たちは女菊を待つことになった。

弓道場の隅にある和室のようなどころでそこらへんに転がっていたお茶を啜っていた。弓道場の中で唯一気の休まりそうな場所だ。

「弓道を見ながらお茶を飲む……風流ですなあ」

「どこらへんがだよ」

「なんか総じて和っぽいじゃん」

「まあわからないでもないが」

他愛もない会話を剛としていた。

しかし弓道とは疲れそうだ。

あんな張り詰めた空気の中で矢を射るなんて、正直俺には無理だ。集中力がもたない。というかもとより集中力なんて皆無に等しい。

その点においては女菊は凄いのかもしれない。

がさつな口調の癖に、妙なところだけ卓越した能力を持ってるな。

時間も6時になり、ようやく部活も終了らしい。

お茶もすっかり無くなり（弓道部にあったお茶だけど）、流石にだらけて来ていた。天宮さんは終始正座をして弓道を見ていた。何が天宮さんをそこまでさせるのだろうか。

「お待たせ。さあ、帰りましょ」

和室で寝っ転がっていると、女菊がいつの間にか制服に着替えてきた。

「じゃあ行きましょう天宮さん」

「はい」

再びあの重い扉を開け外へ出て見ると、外はもう暗くなっていた。部活終わりの時間はこんなに暗いのか。ただでさえ木に覆われているので暗いというのに。

「そういえば女菊はどんなレアリアなの？」

帰路の途中で唐突に剛が女菊に聞いた。

「ヒ・ミ・ツ」

女菊はその金髪を空に舞わせながら可愛らしく振り返った。

「まあ次未来人が来たときに見せてあげ……」

そして、空気が変わった。
暗い夜道、俺たち以外に誰もいない道。そのはずなのだが、気配を感じ取った。

「……祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色。浄写必衰の理を表す……」

夜の冷たい風に乗って、どこからとも無く平家物語の冒頭が聞こえてきた。

四方八方確認するが誰も見当たらない。

「これはまさか、未来人！」

「素晴らしいほどのタイミング……」

背後に気配を感じ振り返った。

そこには黒い長髪の青年がいた。

格好は袴で、なんとも風情のある格好であった。
平安時代の貴族を思わせるような風貌だった。

しかし平家物語が出来たのは鎌倉時代初期のはずだ、平安時代とは関係ないのだろう、と下らんことを考えていた。

「なんか未来人って感じの格好じゃないな……」

「むしろ古い」

「森野さん、奥村さん、来ますよ！」

天宮さんの声に反応し、その未来人の方向へと身構えた。女菊も身構えている。

「俺の名前は比良。ということで、死んで」

「最後まで平安キャラ突き通せよ……」

そういうと比良と名乗るその似非貴人は何やら懷を漁り始めた。
何か出すつもりなのだろうか。なんだ、何が出てくる。

見えたのは闇の中でも一際目立つ黒光りする銃だった。銃撃戦と
かで使われそうなそうとう大きなものだ。

「もうキャラ設定関係ねえな！」

「とりあえず死ね！」

比良は銃口を俺たちに向け、撃ってきた。
指を弾くような高い音を響かせると共に、地面にひびが入って
いた。弾丸が見えない。

「おい、弾が見えないのは反則！」

「知るかあ！」

やべえめっちゃ撃ってくるよ！

しかもあの銃は弾切れが無いようだ。さすが未来の武器。って感心
してる場合じゃねえ！ピンチだ！

「ちょっと、アレじゃ近づけないんだけど！」

「大丈夫ですよ」

天宮さんは落ち着いた様子で答えた。何故そんなに落ち着いてい
られるのですか、天宮さん。明鏡止水ですか。

「女菊さんを見ていればわかりますよ」

女菊を見ると、なにやら先ほどの弓を持ったような姿勢で立っていた。その先には銃を乱射している比良。

「逃げろ女菊！」

女菊の手の中が光り出した。しかし、俺たちがレアリアを出す時の光とは少し違った、暖かい光。

これが、女菊の出すレアリアの光か。

「目覚めよ……アルベリーボウ！」

女菊の手の中に弓が現れた。

弓のサイズは至って平凡なものだが、色と形が若干異質である。

弓は全体的に桃色、というか桜色。女々しさを感じさせるような、少し儚い色だ。

そして何より目に付くのが、ハートだ。弓にはハートの形の装飾がたくさん施されている。両端にも、そして頂点にも。

まあ昔から可愛い物好きの女菊には似合うかもな。

「何それ、弓？ そんな旧時代的な武器で俺の超先天的銃に勝とうって言うのかい？」

重そうな銃を軽々と回しながら比良は言った。かなり挑発的だ。その挑発的な行動には絶対的な余裕を感じ取られた。まだ奥の手があるのかもしれない。用心しなければ。

「古臭い武器かどうかは、身をもって知ることになるわ」

そういうと女菊は持っている弓の弦を引いた。
するとそこに白く輝く矢が現れ、女菊はそれを指で持った。

「いくわよ……瞬きしてると死ぬわよ！」

女菊が白い矢を射った。よく見ると一本では無く、無数に射っている。まさしく雨のようだ。

比良はもといた場所から微動だにせず、女菊の白い矢を全て撃ち落としている。

お互い一步も動かずに撃ち合っている。この張り詰めた感覚は弓道場で感じたものに似ている。

すると、比良が何やらまた懷を漁り始めた。

見えたのは、同じ形のもう一つの銃。もしかこれが奥の手か。

「女菊！ そいつはもう一丁銃を持っているぞ！」

しかし、俺の声は遅かった。

俺が言ったときに比良は既にもう一丁の銃を撃っていた。先ほどの銃とは種類が違うようで、今回の銃弾がはっきりと見える。だが、見えたが故に絶望感は高まった。

その銃弾は黒いエネルギーの塊のようなもので、女菊の白い矢の壁をいともたやすく破っていった。

こうなったら俺が止めるしかない！

「間に合え、ジオフリー……」

スパン。

黒い光弾は女菊の前で突如真つ二つになった。一体何が起こった。

「この似非貴族が……女菊に手え出すんじゃないねえ！」

そこには大太刀を持った剛がいた。いつの間にレアリア出したんだよ。

「何、弓の次は刀？ 古臭い武器が流行ってるの？」

比良は両手に持った二丁拳銃を西部劇のガンマンのように回している。

「大丈夫か女菊」

「あ、うん、ありがとう……」

「じゃあちよつとぶつ潰してくるよ」

比良の方へ向き直り、切っ先を向けた。

「もうお前は……死ね」

「戯言を。死ぬのはお前だ！」

そういうと比良は巨大な黒い光弾を撃った。さっき女菊に撃った

やつよりも遥かにデカイ。5メートルはあるだろう。威力もかなりのものだろう。

だが、不思議と大丈夫な気がした。

剛ならやってくれる、と。

「やっちまえ剛！」

すると剛は逆手に刀を持ち、構えた。

「くらえ、奥義・百過^{ヒヤツカリヨウラン}獵嵐！」

次の瞬間、剛は比良の背後にいた。目にも映らぬ速い斬撃で、黒い光弾は微塵になっていた。

そして比良の身体には斬られた跡と刺された跡が無数についていた。

「馬……鹿……な……」

比良は倒れながら掠れたような声を漏らした。

「テメーにはわからんだろうなあ。大事なものを守るときの力が」

消えてゆく比良を見下すようにして言った。

「今回俺ら何もしてませんね、天宮さん」

「手を出す必要がなかったんですから。それにほら」

天宮さんはフツと指を剛と女菊のいるところに向けた。

「剛かなり強いじゃない」

「え、そう？」

「ちよつとカッコよかったわよ」 「マジで！ よしっ！」

ああ、成る程。剛の強さがアピールされたな。これで剛も恋の成就にもう少しかね。

桜も全て葉桜になった、春の終わりの風は少し暖かった。

第八話：春の終わりの部活見学（後書き）

次からはさらなる上達を目指します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1304b/>

最終計画・未来人討伐作戦

2011年1月28日01時35分発行